

研究ノート

「優しい関係」の展開について

—オタクを事例とした人間関係の考察にむけて—

On the development of "friendly relationship"
— Towards consideration of human relations with case of geek —

渡 邊 秀 司

要 旨

この小論では現代社会の人間関係について「優しい関係」「趣味縁」という二つの視点を概観したうえで、オタクと称される人たちの人間関係の視点を考察するものである。一般論として、オタクの人間関係には現代社会の人間関係とは違う特殊性があるのではと言われるが、オタクの人間関係も現代社会に生きる人たちの人間関係と一貫性を持つのではないかということを考察することを目指すためのものである。

キーワード：オタク・優しい関係・趣味縁・人間関係

はじめに

以前、オタクについてアイデンティティの問題とし、オタクとはオタクであると意識しオタクアイデンティティを獲得した人であるという田川隆博の議論（田川 2009：73-80）を参考にしつつ、そこに他者という概念を足すことで、オタクについて新たに考えることが可能なのではないかという議論を展開した。そのときは他者を「オタク以外の人」という漠然としたもので終わらせてしまった。オタクはアイデンティティにかかわる問題であるという考えは、今でも変わらない。たしかにアニメやゲームにかかわる問題としてオタクを考えることも重要な意味を持つ。オタクのなかには、それらと深くかかわりを持ち制作にもかかわりたいと願っている人もいる。また、アニメ、ゲームというコン

テンツの最大消費者でもある。こうしたことから、オタクに関する議論のなかでは、どちらかといえば消費者としてのオタクを考えることのほうが多い。それもあるが、アニメやゲームが作り出す文化の主体的な担い手として考えてもいいのではと思う。

この小論ではそうした主体的な文化形成の担い手としてのオタクについて考えることも視野に入れつつ、オタクと他者との関係、つまりオタクの人間関係について考察するための前提となる議論について整理する。以前、拙稿の中でオタクと他者との間には緊張感があると論じた。オタクと称される人たちの中には、自分たちとそれ以外の人という意識の強い人が一定数存在している。しかし、現代社会に生きるわれわれ自身も、他者とのかかわり方に悩む人も多い。そこでキーとなる概念として「優しい関係」という概念を考える。「優しい関係」は土井隆

義が『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』の中で論じている人間関係の一つのパターンである。それは対立の回避を最優先する人間関係である。このような人間関係が現代社会において一定の支持層を持ち、一般的な人間関係として存在しているとするのであれば、オタクは「優しい関係」から省かれた存在としているのだろうか。それとも「優しい関係」はオタクたちの中にも当然のように存在しているのだろうか。

人間関係を考える際に、若者論とされる議論を用いることになるが、若者とされる人たちだけを対象と考えてはいない。いわゆる若者論を使用するのは、この小論で考える「優しい関係」が若者論とかかわらせながら議論を展開しているからである。「優しい関係」という議論の前段階には「若者の人間関係の希薄化」という議論があり、若者と称される人たちへの否定的な言説が一時期展開した。しかし、人間関係は濃密なものになっていると考えるようになっていく。ここでは「優しい関係」を理解するために若者論に関する議論の整理も試みる。まずは土井が言う「優しい関係」について述べたうえで、オタクの人間関係を考えるための基礎となる議論を展開できればと考えている。

「優しい関係」とは

土井は『友だち地獄』のなかで、現代の若者を事例としつつ「優しい関係」について述べる。「優しい関係」とは、自分の対人レーダーがまちががなく作動しているかどうかつねに確認し合い、相手から反感を買わないように常に心がける、かつてよりもはるかに高度で繊細な気くばりをともなった人間関係のことである。このような「優しい関係」をとり結ぶ人たちにとって、自分の身近にいる他人の言動に対して常に敏感であり続けなければいけない。そのため「優しい関係」は親密な人間関係が成立する範囲を

狭め、他の人間関係への乗り換えを困難にさせる。互いに感覚を研ぎ澄ませ、つねに神経を張り詰めておかなければ維持されえない緊張関係は、膨大な対人エネルギーを必要とし、身近な関係の維持だけで疲れ切ってしまい外部の関係にまで気を回す余力など残っていないからだという(土井 2008:15-6)。土井の言う「対人レーダー」という表現は独特であるが、筆者としては周囲の人間関係に対しての敏感さが「優しい関係」には不可欠なものとされているとするなら、この表現は適切な表現であると考えられる。土井は現在とり結ぶ人間関係の絶対性を考えているが、そうした人間関係にはリスクが存在している。この人間関係を壊さないようにするテクニックとしてどのようなものがあるのだろうか。

土井がまず言うのは「ばかし表現」である。「とりあえず食事とかする？」というような断定を避けるような表現などを行使して、自らの発言をばかし、相手との微妙な距離感を保とうとする。しかし、対立の芽をつんでいくコミュニケーションをしているつもりでも、相手を尊重する態度を崩さないようにしていたとしても、限度はあり互いの思惑のずれはどうしても広がっていく。土井は別の論で、優しい関係の広がりの中での人間関係について述べている。それによれば、自分にとって不都合なものを目に触れる世界から追い出してしまい、認知の対象とすらしめない傾向を強めているのではないかという。最初から存在していなかったことにするのである(土井 2009:3)。

しかし、相手を傷つけることはしたくない。こうした人間関係の維持というニーズに合うような機能を持つコミュニケーションツール、例えばTwitterのようなSNSが、昔の掲示板と同じような役割を果たしているのではないかと土井は上記のようなことを述べる際に「圏外」という表現を用いるが、いざ「圏外」とされたとき自分が消去されてしまったかのように感じてパニックに陥るのではないかという(土井

2009 : p.3)。「圏外」に対する恐怖感を考えるうえで土井の考え方は示唆的なものと言える。

次に土井が言うのは「スクール・カースト」という表現に示される、日常世界の狭小化である。最近の中高生は数人程度の小さなグループに分かれ、その閉じられた世界のなかで日常生活を営んでいるとし、グループの内部だけで人間関係が完結し、同じクラスであってもグループが違えば別の世界の人間になってしまう。なので「格が違う」「身分が違う」などという表現を用いてグループ相互の上下関係に過剰なほど気をつかいあっている。そして、格や身分の違う人たちのグループとはなるべく交友関係を避けようとするのだという（土井 2009 : 9-10）。

「スクール・カースト」間の交流はなく「圏外」化している。つまり、外部に敵が存在しないのである。外部に敵が存在することは、それを刺激剤にして集団の活性化を図ることが可能なのであるが、現代の人間関係においてはそうした手段をとることができなくなっている。外部の敵に対してエネルギーを発散することができなくなった結果、グループ内での人間関係の圧力が逆に高まる。グループの構成員たちは互いの関係を維持していくためにその関係のあり方それ自体を常に自覚せざるを得ない状態にある。つながり合うこと自体が、人間関係の焦点とされている。このような人間関係のあり方から、予定調和の世界から出ることなく、相補関係を傷つけるような対立は表面化しないように慎重に回避されているのだとし、それを「優しい関係」だという（土井 2009 : 11-12）。

これまで述べてきた議論を展開したうえで、土井は閉塞化するコミュニケーションのあり方を考えていく。異質な人間を「圏外」へ追いやり、同質な人間だけとつながろうとする心性は、以前から存在するものとしながら、現代の「ケータイ」¹⁾を最先端に置くネット環境は好都合なものであるという。「ケータイ」のおかげで、

いづどこにいても、自分がつながりたい相手だと即座につながることが可能になるからである。「ケータイ」の普及する前は、時間と空間を隔てた相手とコミュニケーションをとるための手段は限られたものであり、意中の相手とつながるためには自分にとっての不都合な人間とのコミュニケーションも途中で経由しなければならなかったが、ネット環境によって異質な人々とつながることを可能にするとともに、同質な人々がたがいにつながり合うことを可能にする手段を得たのだという（土井 2009 : p.54）。では、このことが人間の孤独感を解消してくれるのかとえば、そうではないと土井は言う。「ケータイ」は常時接続を可能にしてくれることで孤独を解消するようできて、そのもののニュートラルな性質もあり、使われ方次第で孤独を増長してしまうこともある。その結果起こった事件の事例として2008年6月の秋葉原での連続殺人事件をあげ、「ケータイ」はその犯人の疎外感を強めるツールとなったのだという。人間関係を異質な他者へと広げていくツールではなく、同質な人間だけで固まることで関係の狭小化を促進していくはたらきを担っているのである。

今までの議論をしていく中で土井が言うのは「自分に対する内閉的なまなざし」ということである。土井は自分の居場所を気にするのは、自分に対する内閉的なまなざしを注ぐ結果として、期待する自己承認を得ることができずに居場所がないのではと不安になり、生まれ持った自分への思い込みが強ければ強いほど、そんなものが見出せない現在の自分のすがたに直面した時、喪失感もそれだけ大きなものになるのではという（土井 2008 : 223-5）。自分らしさという言葉がよく言われるが、それこそが檻になって自らを縛っているのである。そうした「自分らしさの檻」の拘束を受けつつ、現代社会の人間関係の技法として「キャラ」があるのだと考える。

「キャラ」について土井はリカちゃん人形を事例に上げて説明する。リカちゃん人形は子どもたちにとって憧れの生活スタイルを演じてくれるイメージ・キャラクターであり、発売元であるタカラトミーが情報を提供し、設定された物語の枠組みの中で子どもたちは「ごっこ遊び」を楽しんでいたが、現在のリカちゃん人形は別のキャラクターを演じているという点に注目する。実際、2017年現在、タカラトミーの商品サイトを見ると「マイメロディ」「リラックマ」といった他社のキャラクターとのコラボレーション商品が売り出されている²⁾。土井は自身がキャラクターであるはずのリカちゃんが、まったくの別キャラクターになり切っていることについて、特定の物語を背後に背負ったキャラクターから、どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラへと変化しているのではと考える。それは、人々に共通の枠組を提供していた「大きな物語」が失われ、価値の多元化によって流動化した人間関係のなかで、それぞれの対人場面に応じたキャラを「外キャラ」という。これを意図的に演じ、複雑になった関係を乗り切っていこうとする現代人の心性を示しているのではないかという（土井 2009：20-4）。

外キャラに対応する概念として「内キャラ」というものを土井は述べる。「外キャラ」は対人関係における技法として存在するものであるが、対して「内キャラ」は自分の絶対的な拠り所であるという。高度成長期のような成長が望める状況ではなく、むしろ成熟した現代社会では、社会の発展から取り残される不満から、社会から落ちこぼれる不安へと生きづらさの内実が変化しているという。現代社会の生きづらさの内実の変化は、漫画のような大衆娯楽においてもみられるもので、以前のようなストーリー展開の巧みさで読ませるのではなく、登場するキャラクターの造形描写で読者をひきつける作品が多くなっているとし、なぜなら、物語の登

場するキャラクターたちの性格は変わらず、あらかじめ細かく設定されているもので、物語の文脈には全く依存しない。個々のエピソードは登場人物たちのキャラを鑑賞する舞台装置に過ぎない。このような現代社会における物語とキャラクターの関係について考察しつつ、人生の中で成長していくことに対する懐疑と、生まれ持った自分へのこだわりの強さを暗示しているのではないかというのである。つまり、本当の自分は社会生活の中で変化することのない生来的で固定的なものだととらえられているのではないか、それを「内キャラ」として認識しているのではと考えるのである（土井 2009：27-31）。

「趣味縁」という考え方

「趣味縁」とは何か。ここでは浅野智彦が『趣味縁から始まる社会参加』で論じる内容を述べていく。浅野は社会参加とは何かということから議論を始める。社会参加とは社会においてさまざまな問題が起こるとき、個人やその個人の身近にいる人たちが協力し合ってそれぞれの問題に対処していくのであるが、その個人や周囲にいる人たちだけでは対処しきれない問題も生じることがあり、そのような問題に取り組むために、なじみのない他者あるいは見知らぬ他者との間に協力関係を築きあげていくことを言う（浅野 2011：8）。浅野はcivic engagementと呼ばれるものに絞って考えとし論じていく。civic engagementとは「問題解決と他者支援に照準した組織化された自発的活動」と定義されるものであり、このような協力関係を必要とする社会、また有意味であるような社会とは、身近な小さい範囲の社会関係では統御しえない運動がより大きな範囲の社会関係を貫徹するような社会であり、私たちの生きる「近代社会」とはそうした社会であるとする。このような社会は人間が介入することで変化する可能性を持つ

が、個々人の人間が介入によって容易に変わるものでもない。一人一人の視点から見れば社会は自然現象のように変えがたいもののように見える。しかし、それなりの人数を動員すれば変化させられないわけでもない。こうした変化のダイナミズムが主題化するのが「近代社会」であり、個人や身近な範囲の関係と社会との間に広がる落差を埋めるべく多数の人々の間に協力関係を組織しようとする試みが、社会参加なのだという（浅野 2011：9-10）。

そのうえで、現代の若者における友人関係の変化及びその特質について論じている。そのうえで、公共性に関わって生じてきている問題を述べる。浅野が言うのは若者の生活世界におけるリアリティ、現実世界に「分断線」が生じてきているということである。「分断線」についてケータイ小説の受容者である高校生と、それを受容しない大学生の事例を挙げたうえで、学歴にともなう「学歴分断線」の存在を示唆するものではないかという。この事例についての是非はともかく、先ほども述べた「スクール・カースト」と「圏外」の議論から考えられる内容である。浅野は島宇宙化した若者文化という考え方がされてきたことを踏まえたうえで、以前からの議論では島宇宙化した若者文化とは、住み分けの感覚として論じられてきた。つまり、島宇宙化した若者文化全体を俯瞰した視点の存在を含意するものとしていたのだが、今日生じているのは、住み分けしているということ自体が見えにくくなっている状態の常態化なのではないかという。この断絶は、同じ高校を卒業した人たちにも影響を与えていて、同じ学校を出た人は同じような人生を歩むという同行者意識や仲間意識を持つことが難しくなっている。これを浅野は見えない断絶が進行している状態ととらえている。この状態は社会参加や公共性の観点から言えば望ましい状態ではない。親密性の濃密化が同時に分断された文化的下位集団への内閉を意味しているなら、見知らぬ他者との協力

関係は難しくなるという（浅野 2011：25-7）。

親密性と公共性は一見すると相反するものとして考えられるかもしれないが、そこで両者を橋渡しするものではないかとして、浅野は趣味縁を提案する。趣味に関わる興味や関心であるとしても、それによって徒党を組むということが公共性に転化するということが期待できるのではないかと問いかけていく。趣味縁とは趣味によってつながる人間関係のことである。草野球チームやコミックマーケット（コミケ）に参加する同人サークル、歌舞伎の鑑賞会に定期的に参加する集まりなど、趣味を仲立ちにしたつながりにはさまざまなものが考えられる。趣味縁と公共性という一見つながりようのないものの関係性を考えるうえで、浅野は社会関係資本について論じている。社会関係資本とは、経済的な資本、人的資本などと言われるような各種資本と同様に何らかの利得を得るための資本である。ある社会関係自体が利得を得るための元手になっているような場合にこの言葉を使うのだという。悩み事に相談に乗ってくれる友人がいること、転職の際に手助けをしてくれる友人がいることなどが例として考えられる。そうした関係性において、資本が生み出す利得をもっぱら資本の所有者が享受すると考えるか、その利得を所有者以外の人も含めた共同体全員によって享受されると考えるか、二つの方向性がある。浅野は後者の考え方にもとづくとして、趣味縁を論じていく。この小論で述べるべき内容としては、趣味によって結びつく集団は、異質な他者を認めない単なる仲良し集団になってしまうのではという問いかけに対して、浅野が言う三つの特徴である。第一の特徴は、趣味縁はその趣味への愛が深ければ深いほど、時にその内部に強い葛藤を生み出すこと。第二の特徴は、その葛藤はしかし同じく趣味への愛によって（常にというわけではないけれども）克服されていくということ。第三に克服の過程の要になるのが尊敬や敬意とでも呼ぶべき承認関

係であること。その三つであるという（浅野 2011：36-51）。趣味に基づく集団の持つ求心力の意義に浅野は注目している。

結 び

今まで述べてきた「優しい関係」「趣味縁」は、現代社会の人間関係を考える上で興味深い視点を提供してくれる。「優しい関係」は昨今よく論じられている「後期近代」の議論を視野に含めながら考えていくと、興味深い議論を展開することが可能である。この場で詳細に論じることにはできないが、ギデنزとはポストモダン性の議論を整理しながら「われわれは、モダニティの彼方に移行したのではなく、モダニティが徹底化した局面を、まさに生きている」（Giddens 訳書 1993：70）と述べている。つまり、現代を近代社会の延長線上にあるものとして考察する。「後期近代」に関わる議論については様々あるが、それを道具的に使うことで自論を展開しようとするものが多い。この小論もそうした論の一つである。とはいえ、理論的な内容についてこの小論では詳細な検証はできない。まずは「優しい関係」が現代社会を考えるうえで重要な要因であることを意識していくことが重要だと考えている。オタクという特殊な状況にある人たちであったとしても、現代社会の枠組から完全に逃れた存在ではない。「趣味縁」は人間関係の濃密さからくる他者と共同することの難しさに対する、打開策を模索する過程の中で出てきた考え方である。この中ではオタク集団を事例として述べている部分も多い。オタク集団の閉鎖性や単なる消費者としてのオタクだけではない、新たな公共性について考えるのである。

「優しい関係」「趣味縁」という視点を考えつつ、この小論では十分に検証することができなかったが、現代社会の人間関係における「濃密さ」とそれにともなう苦しさは重要な問題であ

る。以前オタクについて論じた時の「緊張感」という視点は、より精密に考えなければいけない問題だと改めて考えている。社会参加といった時、その苦しさは大きなハードルとなる可能性を秘めているだろう。しかし、「濃密さ」を求める方向性は何らかの集団に所属すること、その集団のために行動することを求めることを志向するのではないだろうか。この点についてより深い考察を行うことができれば、現代社会における人間関係、公共性の構築に何らかの視点を提供できるのではないかと考える。

注

- 1) 2009年当時の携帯端末事情からケータイという表現が用いられているが、現状のスマートフォンの普及率とその使用方法も土井が言うような議論を援用して考察することは可能だと思う。ゆえに括弧つきで「ケータイ」という表現を用いることとした。
- 2) タカラトミーリカちゃん人形サイト
(URL: <http://licca.takaratomy.co.jp/>) 参照。

文 献

- 浅野智彦, 2011年『趣味縁から始まる社会参加』若者の気分, 岩波書店。
- 田川隆博, 2009年「オタク分析の方向性」『名古屋文理大学紀要』第9号73-80。
- 土井隆義, 2008年『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書。
- , 2009年『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレットNo.759。
- A.ギデنز, 松尾精文・小幡正敏訳, 1993年『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結』而立書房。
- 渡邊秀司, 2014年「オタクの言説—外部との「緊張感」を考えるために」『佛教大学大学院紀要 社会学研究科篇』第42号 37-54。

（わたなべ しゅうじ
佛教大学非常勤講師）